

神は世を愛された

(神の恵み深い救い)

ヨハネ福音書3:16-21

【新改訳2017】

- 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
- 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。
- 3:18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。
- 3:19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。
- 3:20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。
- 3:21 しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。

【祈りながら考えよう】

- (1) ヨハネ3章16節は、聖書全巻の中で最も有名な聖句として挙げられるのはなぜですか。
- (2) 「神はそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」とは、どういう意味ですか。
- (3) なぜ「御子を信じる者が滅びないで永遠のいのちを持つ」ことが出来るのですか。

【解説】

(1) 聖書全巻の中で最も有名な聖句

《神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。

それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである》(16節)

ヨハネ3章16-21節には、ニコデモとの対話で明らかにされた「イエスの死によって私たちに与えられるいのちの賜物」に関する福音書記者の解説が述べられている。

3章16節は、聖書全巻の中でも最も有名な聖句である。この聖句は小福音書とも呼ばれ、キリスト教のメッセージを完全に要約して、決定的な神の愛を語っている。そのため多くの者の愛唱聖句となっている。

福音を実に明確に、また簡潔に述べている。どのようにして新生を受けることができるのか、主イエスがニコデモに教えておられた内容がここに要約されている。

(2) 神の愛

「そのひとり子」とは、イエス・キリストのことである。この「ひとり子」という言い方は、神そのものであられるお方という意味でもある(尾山令仁/ヨハネ福音書講解)。

神の愛の広さは、「世を」という言葉の中にいかに表されている。「神は世を愛された」の「世」という言葉には全人類が含まれている。

神は人間の罪や邪悪な世の仕組みを愛してはおられないが、人間を愛し、だれ一人として滅びることを望んではおられない。

① アブラハムでの実例

神の愛は、信仰の父アブラハムに起こった出来事によっても示された。神は以前、アブラハムに約束の子イサク

をお与えになったことがあった。そのイサクの子孫から救い主が生まれ、その子孫は多くなるとも約束された。

ところが、ある日のこと、神はアブラハムに対して仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい」(創世記22:2)

アブラハムは、イサクの子孫から救い主が生まれるとか、その子孫は多くなるという約束と全く矛盾するように思われるこの度の神のご命令に対して従順に従い、その子イサクを連れてモリヤの山へ、神が告げられた場所に来て、祭壇の上にその愛する子イサクを縛り上げ、刀をとって、まさに殺そうとした時、天から御声があって、それをとどめられた。その時、天の御使いはこう語っている。

「その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。

今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。

あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」(創世記22:12)

最愛の自分の子供をさえ、神のために惜しまずささげるということは、神を恐れている何よりの証拠であった。

そうであるとするならば、今度は逆に、神がその「ひとり子」をさえ惜しまずに私たちのために死に渡されるということは、神が私たちをかけがえのない大切な者として、「愛してくださっている証拠」にほかならない。この神の愛がいかに深く、大きなものであるかということは、アブラハムの実例によって、よく分かる。

「ひとり子をお与えになったほどに」とは、神の愛の深さ・広さを物語っている。父なる神にとって主イエスのような御子は他におられない。かけがえのない御子を、反逆する罪人たちのために惜しみなく与えられたのは、「神の無限の愛の表れ」であった。

この世(人類)は、神によって造られたにもかかわらず、その神を愛するどころか、神に背を向け、罪の奴隷となっている。それなのに、背信と不遜のかたまりのような、罪に満ちた人間を、神は限りなく愛された。

私たちの罪をイエスに背負わせ、十字架の上で断罪された。それによって神は私たちに罪の赦しと永遠のいのちを賜ったのである。ここに「神の無限の愛」がある。

② 母親の愛

神の愛は、人間が知らない愛である。この地上で、神の愛に最も近いと言われているものに、母親の愛がある。子に対する母親の犠牲的で、無私な愛にまさるものはない。この母の愛は、その糸をたぐっていくと神の愛にたどり着くと言われるほど、崇高な愛である。

しかし、この母親の愛も「私の子」という自我の領域を越えることはできない。愛の対象の中に、自分に還元される何らかの価値を認めている。ある人のことを借りれば、一番すぐれていると言われている母親の愛も、やはり相手から惜しみなく奪う愛にすぎない。

自分に不利益をもたらす、百害あって一利なしの者に、惜しみなく自らを与え尽くす愛は、私たちの内に存在しないばかりか、およそ私たちの知り得ないものである。

③ 神の愛

十字架に示された神の愛は、神に敵対し、ついにイエスを殺害してしまった者に対してさえも惜しみなく自らを与え尽くす愛である。別の言い方をすれば、神は罪ある者をそのあるがままの姿で受け入れてくださったのである。

イエスの受肉の目的は、人がだれ一人として罪に定められることなく、神の救いといのちにあずかることである。だが、忘れてはならない大切なことがある。神の愛は、イエスを信じる者にも信じない者にも、すべての者に対して事実与えられたのであるが、永遠のいのちはイエスと無関係には与えられない。

救いに関しては、イエスと自分との関係が決定的な要因となる。すべての人に救われる道が備えられているが、その前に主イエス・キリストを「個人的な救い主」として認め、受け入れなければならない。そうする時に、永遠のいのちを今、所有する人となる。

それは、「御子を信じる者にのみ」永遠のいのちが賜物として与えられるからである。「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく」という言葉が付加されているのは、その理由である。

《神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、

御子によって世が救われるためである》(17節)

神のお心は人間に対する温情に満ちている。そのゆえに、人間を救うために、極限までの犠牲を払われた。御子を遣わして世をさばくこともできたのに、そうはされなかった。

それどころか、御子が苦しみ、血を流し、死ぬようにと、神は御子をお遣わしになった。それは、この世(私たちが御子を通して救われるためである。

(3) 人類を二分すること

《御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。

神のひとり子の名を信じなかったからである》(18節)

イエスに対する応答の仕方によって、人類は救われる者とさばかれる者とに二分される。終末に下される神の最終的審判を待つまでもなく、イエスを拒む者はすでにさばかれている。ここにこの福音書の特徴がある。

「御子を信じる者はさばかれない」という表現は、「赦された、無罪とされた、義とされた、あらゆる罪過ちが赦された、律法を破ったことに対する呪いから解放された、もはや罪人とされない、むしろ神の目の前に完全に義なる者と認められる」というのに等しい。

「主を信じない者は…すでにさばかれている」この文章は、キリストを信じることを拒む者は、生きている時にすでに、神の前においてさばかれている状態にあることを意味している。

我々の永遠の行く末を決定するのは、神の御子に対して取る「私たちの態度」である。主イエスは救いのみわざを成し遂げられた。その救い主を受け入れるか、それとも拒むかという決断は一人ひとりにゆだねられている。

このような愛の賜物を拒むのは恐るべきこと。もし、主イエスを信じないのであれば、神はそのような人を罪に定めるしか方法はない。

(4) 人々が光よりも闇を愛した

《そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。

悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない》(19-20節)

イエスはこの世に来られた「光」である。イエスは、罪のない完全無欠な神の小羊である。イエスは全世界の罪のために死なれた。しかし、はたして人間はそのゆえにイエスを愛しているか。否、かえって恨んでいる。

人間はイエスを救い主として迎えるよりは、罪のほうを好む。だからイエスを拒むのである。ある種の虫が光に当たると、光を嫌がり、慌てて逃げ出すように、邪悪な人間も、キリストの御前から逃げ出すのである。

罪を愛する者は光を憎む。それは、「光」が彼らの罪深さを暴露するからである。イエスがこの世に来られると、罪ある人々は、主がおられるだけでいたたまれなくなった。主ご自身の聖さによって彼らのひどい状況が露わになったからである。1本の棒が曲がっているかどうかを調べる最良の方法は、まっすぐな棒をその横に並べてみることに。完全な人としてこの世に来られた主イエスは、ほかの全ての人々のゆがみを、比較によって明らかにされた。

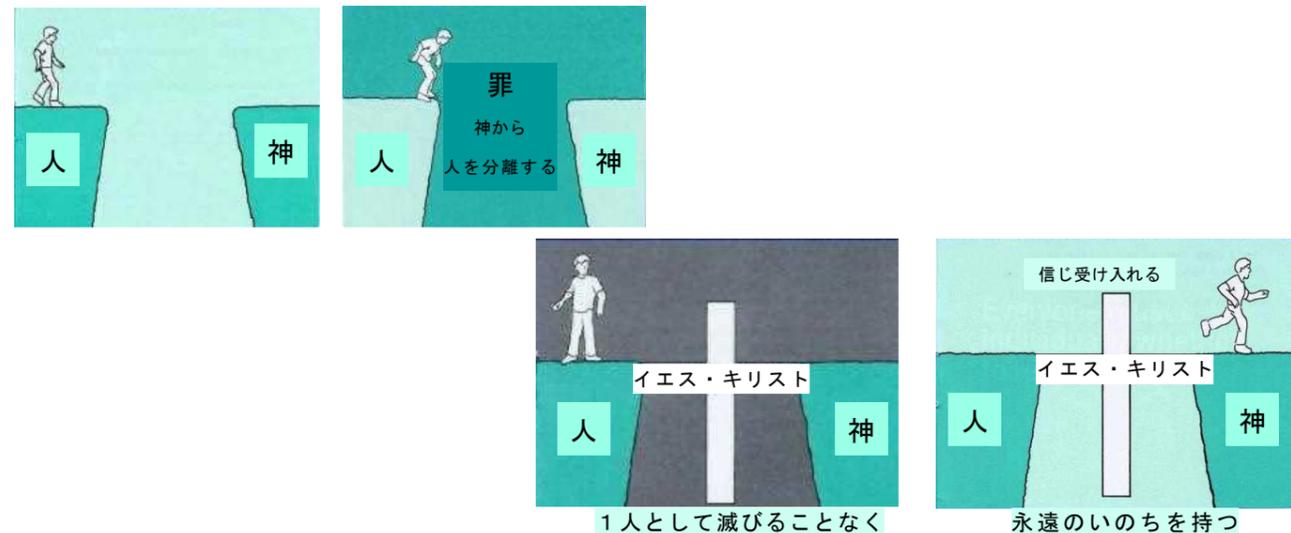
(5) 真の信者の特徴

《しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る》(21節)

「真理を行う者」とは、心が正直な人、真に回心した人を指している。もし、神の前に本当に正直であれば、光、つまり主イエスのもとに来て、自分が罪深い無価値な者であることに気づく。

それから、自分の救い主として主を信じ、キリストに対する信仰によって新生するはずである。彼らは神から生まれた、神の子どもであるので、神からの新しいいのちを得ている。

それで、真の信者は、神との親子の交わりを習慣的に求める。聖霊も神の子どもたちの中で働いて下さり、彼らに神の御心を行わせて下さる。そして、私たちは、その行いを自分の努力の結果として誇ることはせず、自分を通して行われた聖霊のみわざとして神に栄光を帰する。



神は、実に、そのひとり子を

月の沙漠のメロディ

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ3:16)

arranged by
Chicko Hatanaka

♩=80

つきの - さばくを は - る ばると たび
かみは じつに - そのひ - とり子を おあ
の - らくだが ゆ - き ました きん
たえ になったほどに 世 - を あいされた それ
えい
と - ぎんと の く - ら おいて ふた
は 御子 を しんじる ものが ひと
えんの いのちを 持った めで - ある ヨハ
つ - ならんで ゆ - き ました
り とし て ほろびる ことなく
ネ さんしょう じゅうろ くせつ

- 月の沙漠を はるばると
旅のらくだが 行きました
金と銀との くら置いて
二つならんで 行きました
- 金のくらはは 銀のかめ
銀のくらはは 金のかめ
二つのかめは それぞれに
ひもで結んで ありました
- 先のくらはは 王子さま
あとのくらはは お姫さま
乗った二人は おそろいの
白い上着を 着てました
- ひろい沙漠を ひとすじに
二人はどこへ いくのでしょうか
おぼろにけふる 月の夜を
対のらくだは とぼとぼと
砂丘を越えて 行きました
だまって越えて 行きました

神は、実に、そのひとり子を
1 神は、実に、そのひとり子を
お与えになったほどに、世を愛された
それは御子を信じる者が、
一人として滅びることなく、
永遠のいのちを持つためである。
ヨハネ 3章 16節
2 (1節を繰り返す)

